『西南アジア研究』No. 23, 1984

# シャー・アッバースの改革とコルチ

羽　田　　正

## はじめに

西暦1588年，自らの師傅 Muršīd-qulī Ḫān を暗殺し，国政の実権を掌握したサファヴィー朝第5代のシャー，'Abbās I 世は，第2代シャー，Ṭahmāsp の死後紊乱の極にあった国内秩序を回復すること，さらに国境を接する東西の両強国，ウズベクとオスマン帝国に対抗する力を持つことを目的として，政治，経済，軍事各方面に亘る一連の改革に着手した。世に言う「シャー・アッバースの改革」である[1]。このうち政治，軍事面の改革として従来具体的に指摘されているのは，国内混乱の元凶となった Qizilbāš—トルコマン遊牧部族—の勢力を弱体化させるため，1. 宮廷の *ġulām*（奴隷）を組織して *ġulām* 常備軍を建設し，Qizilbāš の軍事力に対抗させること，2. 有力な Qizilbāš 大部族を幾つかの小部族に解体すること，などの国内の治安回復策，それに，近代装備のオスマン帝国軍に対抗するため *tufangčī*（銃兵）軍，*tūpčī*（砲兵）軍を拡充，整備することという対外向け施策である[2]。この改革がかなりの程度成功したことは，1629年 Šāh 'Abbās が40年以上に及ぶ治世を終えてこの世を去った時，国内秩序が一応安定し，東

1) この改革の研究状況については，〔羽田 1984：3註2〕参照。

2) アッバースの改革の諸施策が対国内，対国外の二つの側面に大別できることは，従来看過されている。一般に，*ġulām* 軍，*tufangčī* 軍，*tūpčī* 軍の三軍がまとめて〝新軍〟と称せられ，これが旧来の Qizilbāš 勢力と対抗させられたかの如き説明がなされているが〔例えば *TM*：30-31〕，*tufangčī* 軍，*tūpčī* 軍にはかかる国内統治強化のための役割は殆んど期待されていなかった。これら両軍は，専らオスマン帝国軍の近代装備に相対する為の実戦部隊であったと言える。'Abbās I 世期 *tufangčībāšī* の具体名は一人も年代記に現われず，それ以後も *tufangčībāšī*，*tūpčī-bāšī* が政治的に重要な役割を果たした事実は全くないことが，これら両軍の限定された政治的役割を物語っている。

西の失地が完全に回復されていたことから明らかであろう。

ところで，このシャー・アッバースの改革について，これまでの研究者は，シャーの権力基盤が *ġulām* 集団に移ったこと，この改革をもって Qizilbāš の政治的役割は終了したことなど Qizilbāš の勢力削減という側面を強調する立場をとってきた[3]。この改革がかかる側面を持っていたことは事実である。しかし，この面のみを強調して一面的に捉えすぎると，'Abbās Ⅰ世死後その後継者達がしばしば断行した *ġulām* 弾圧[4]や，サファヴィー朝滅亡後 Qizilbāš の一員であった Afšār 部，Qāǧār 部などが興隆し，新たな王朝を建設したことの説明がつかなくなってしまう。そもそも，「弾圧」と言うが，Šāh 'Abbās 以前の時代，支配階級内で確固たる位置を占めていた Qizilbāš[5]が *ġulām* の軍事力だけを背景としたシャーの「弾圧」に簡単に屈服したとは考えにくい。もう少し詳細に，そして多面的に Šāh 'Abbās の施策を根本史料に基づいて検討してみる必要がありそうである。

本稿は，サファヴィー朝前半期には広い意味で Qizilbāš の一部をなしたシャーの近衛軍たる *qūrčī* 軍が，アッバースの改革の後如何に変化したのかをペルシア文・欧文史料に拠って考察し[6]，これをもとに，この改革の現在まで知られざる一側面を明らかにしようとするものである。その結論は，上で述べたシャー・アッバースの改革をめぐる幾つかの疑問に答えるための一つの糸口を提供することにもなろう。

3) 例えば〔SAVORY 1982：72〕，〔ROEMER 1983〕。

4) Šāh Ṣafī 時代の初期，1632-33年に Fārs と Kūh Gīlūya 州知事 Imām-qulī Ḫān b. Allahvirdī Ḫān がその一族と共に処刑される〔*HS*：130-131〕。また1631-32年，宮廷の実力者 Yūsuf Āqā, *yūzbāšī-yi ġulāmān-i ḫāṣṣa-yi šarīfa* がその血縁のもの（Šīrvān 知事 Qazaq Ḫān Čīrkis など）と共に滅ぼされる〔*TR*：31b〕。Šāh 'Abbās Ⅱ世時代初期には *ġulām* 出身の大立物 Rustam Ḫān sipahsalār が処刑される〔*AN*：46-49〕。

5) 王朝草創期 Šāh Ismā'īl Ⅰ世時代に彼らが果たした役割の重要性については〔羽田 1978〕参照。

6) アッバースの改革に関して後世の欧文史料の概括的記述だけを参考にするわけにはゆかない。しかし，ペルシア語年代記がこれについて系統的な記事を遺していない以上，この改革の具体的内容を把握するには，'Abbās Ⅰ世親政期（1588-1629）の以前と以後についてそれぞれ，断片的な諸史料中の記事をつなぎ合わせ考察対象の全体像を再構成した上でこれを比較・検討する方法を採らざるをえない。その意味で，筆者は最近アッバースの改革以前の *qūrčī* の諸特徴を詳説した〔羽田 1984〕（以後これを前稿と呼ぶ）。本稿の特に第Ⅰ・Ⅱ章はこの前稿と密接な関係を有しており，あわせて参照戴ければ幸いである。

## I　qūrčī と qizilbāš

アッバースの改革以前の *qūrčī* は，その時代の文献史料中で近衛兵の意で使用されており，トルコマン遊牧民を中心とし，サファヴィー政権を支える軍事力全体を指示する語 *qizilbāš* とは明確に区別されていた（前稿５～10頁）。それでは改革以後この両語は，欧文，ペルシア文の史料でどのような意味で用いられているのであろうか。

（i）欧文史料

サファヴィー朝後半期の歴史を考える際，豊富に遺されている欧文史料の援用なしにその全体像を再構成することは不可能である[7]。*qūrčī* についても，この時代になると，むしろ欧文史料により詳しく系統的な記述が見られる。そのうち主要なものだけを取り上げても十指に余り，関連記事を抜粋引用することは本稿に与えられた紙幅を考えると到底不可能なので，ここでは前稿で問題にした *qūrčī* と *qizilbāš* の関係に焦点を絞り，これが欧文史料でどのように扱われているかを以下の如くに整理分類してみた。

(a) *qūrčī* とは近衛兵，*qizilbāš* とはトルコマン遊牧民のことで，この２つの語は全く別のものを指示する：DELLA VALLE（pp.350-355）

(b)両者の関係は曖昧であり，著者は両語を同一と見做していた可能性が高い：OLEARIUS（p.414），DE CHINON（pp.43-44），DU MANS（p.154）

(c) *qūrčī* と *qizilbāš* は共に王朝創建以来のトルコマン遊牧民軍団を意味し，同義である：TAVERNIER（pp.591-592），THÉVENOT（p.191），CHARDIN（pp.298-302），KAEMPFER（pp.92-93），SANSON（pp.31-32），GEMELLI-CARRERI（p.382）

この分類より，当時のヨーロッパ人観察者が *qūrčī* と *qizilbāš* の相違に殆んど無関心で

7) その重要性にもかかわらず，イラン史の立場から16－17世紀欧文史料を包括的に用いた研究は今日までまだ現われていない。欧文史料がしばしば利用されるのは，この時期のヨーロッパとイランの外交・貿易関係を扱った外交史的研究と各旅行者の伝記にほぼ限られる。前者には，個別論文を別にすれば，概説的な K. Bayani, *Les relations de l'Iran avec l'Europe occidentale à l'époque safavide*, Paris 1937の他に，B. von Palombini, *Bündniswerben abendländischer Mächte um Persien, 1453-1600*, Wiesbaden 1968, S. Schuster-Walser, *Das Safawidische Persien im Spiegel europäischer Reiseberichte (1502-1722)*, Hamburg 1970などがあり，それぞれの文献目録を利用してある程度欧文史料全体に関する知識を得ることが出来る。また Du Mans, *Estat de la Perse en 1660*, Paris 1890の校訂者 Ch. Schefer がこの書の冒頭百頁あまりに亘って主たる欧文史料についての解説を行なっており有益である。

あったことが直ちに了解されよう。欧文史料を主な典拠としたMinorskyが*qūrčī*と*qizilbāš*を同一と考えたのも至極当然であったわけである（前稿5-6頁）。

またこれとともに，時代が下れば下る程，欧人観察者の目に映る*qūrčī*と*qizilbāš*の区別が曖昧となり，ついには両者は同一と見做されるに至ったという興味深い事実が浮かび上ってくる。即ち，時期的に最も早くイランを訪れた(a)のDELLA VALLE（1617-18）だけは唯一両語を区別しているが，17世紀半ばの(b)グループは両者の差異に全く無関心であり，17世紀後半の(c)グループに至って*qūrčī*と*qizilbāš*は同義とされるようになるのである。

もっともKaempferの如く何人かの欧人記録者は，それぞれの報告を著す際，既に発表されていた同種の書を参照していた［KAEMPFER : 16］。それ故，上で挙げた欧文史料のすべてがその著者の個人的体験に基づいた記述であるとは確言できない。しかし，これら先人の記録を参照した人々も，もし自らの見聞が先人のそれと異なっていれば，報告の内容を書き改めたはずであり，してみると，17世紀にイランの地を訪れた殆んどすべてのヨーロッパ人は，*qūrčī*と*qizilbāš*を同義と考えたか，或いは少なくともこの両語の差異には無関心であったと結論づけることができよう。

この事実を，外国人によるイラン社会の皮相的理解，認識不足から来る誤りとして葬り去ってしまってよいものであろうか。筆者には，欧文史料から得られるこの一連の事実が，Šāh ʻAbbāsの一つの政治的意図，そしてその結果としての軍制改革の一断面を反映しているように思えてならないのである。

(ii) ペルシア文史料

欧文史料とは異なり，ペルシア文史料においては，ʻAbbās Ⅰ世時代以後も*qūrčī*軍とQizilbāšのアミールが指揮する部隊は依然として区別され続けている。

例えば*RM*にはʻAbbās Ⅰ世時代にコーカサス方面で行なわれた二度の攻城戦の結果が詳細に記されているが，それを分類して示すと次の通りである。

Ⅰ．Erivan包囲戦（1012/1603-04）における各部隊戦績

| | |
|---|---|
| *qūrčī*軍（*ǧamā ʻat-i qūrčiyān*） | 敵の首450 |
| *ġulām*軍（*ǧamāʻat-i ġulāmān*） | 600 |
| Muqaddam部軍（*ǧamāʻat-i muqaddam*）[8] | 16 |
| ʻAlī-qulī Ḫānの従者（*mulāzimān*） | 56 |

8) この部族に関しては〔SÜMER 1976：198-199〕参照。

| | |
|---|---|
| Šāhīsivān 部軍（*ǧamāʿat-i šāhīsivān*）[9] | 202 |
| Qarā Ḥasan Ḫān Ustāǧalū の従者 | 80 |
| Amīr Gūna Ḫān の従者 | 52 |
| | 〔*RM*：120a–b〕 |

II．Šamāḫī 包囲戦（1016/1607-08）における各軍の戦績

| | |
|---|---|
| *ġulām* 軍 | 敵の首550 |
| *qūrčī* 軍 | 801 |
| Ḏū al-Faqār Ḫān Qarāmānlū の従者 | 905 |
| Pīr Būdāq Ḫān の従者と Tabrīz の人々（*tabrīziyān*） | 52 |
| Allāhvirdī Ḫān の従者 | 12 |
| Qarā Ḥasan Beg の従者 | 21 |
| Naḏr（？）Ḫān の従者 | 6 |
| ʿAlī-qulī Ḫān Šāmlū の従者 | 50 |
| Šāh-qulī Sulṭān Bayāt の従者 | 30 |
| Āqā Beg Sulṭān Muqaddam の従者 | 50 |
| Ḫurāsān 集団（*ǧamāʿat-i ḫurāsāniyān*） | 3 |
| Māzandarān 集団 | 30 |
| Tāliš 集団 | 23 |
| Šāhīsivān 集団 | 52 |
| | 〔*RM*：150a〕 |

Ḏū al-Faqār Ḫān や Pīr Būdāq Ḫān の如き Qizilbāš アミール配下の軍は *qūrčī* 軍とは呼ばれておらず，*qūrčī* 軍と Qizilbāš の部隊がはっきりと区別されていたことが分かる。Qizilbāš アミールのうち，Ḏū al-Faqār Ḫān は1610年にシャーの不興を買い処刑されるが，この時彼の従者の一部が *qūrčī* 軍に編入されたという事実〔*TAA*：806〕も，当時 *qūrčī* と *qizilbāš* が別々に存在していたことを証明している。

この状況はさらに後代，ʿAbbās II 世時代（1642-66在位）になっても変化していない。1648年サファヴィー朝軍は ʿAbbās II 世指揮下ムガール帝国支配下にあった Qandahār を包囲するが，*AN* はこの時の陣構えを詳細に記している（*AN*：114-115）。内城の南

9) サファヴィー朝期のこの集団の成立については R. Tapper, "Shahsevan in Safavid Persia" *BSOAS* 37（1974）pp.321-354に詳しい。

北両面に布陣したサファヴィー軍は全部で28の部隊からなり，北面に主力軍22部隊，南面に残りの6部隊が位置する。北面22部隊のうち14部隊が *qūrčībačī* の Murtaḍā-qulī Ḫān と *qūrčī* 達，6部隊が *qullarāqāsī* の Siyāvuš Ḫān，他の2部隊がそれぞれ *amīr-i šikārbāšī* の Allahvirdī Beg と ʻĪsā Beg に委ねられた。一方南面の部隊は Murtaḍā-qulī Ḫān Qāǧār, Pīrī Būdāq Ḫān Turkmān, Mahdī Ḫān, Kalb ʻAlī Ḫān Afšār, Āqā Ḫān Muqaddam らの指揮下にあったという。

この史料より，*qūrčī* 軍，*ġulām* 軍など欧文史料が常に言及する軍以外に，サファヴィー朝前半期と同じく，Qizilbāš のアミールが指揮する部隊が軍隊の中に厳然と存在していたことが明らかとなるのである[10]。

以上より，アッバースの改革以後の *qūrčī* の語の意味については，欧文，ペルシア文の両史料間に際立った差異が認められることが諒承されよう。欧文史料の大部分は，これが *qizilbāš* と同義であるとし，一方ペルシア語年代記は *qūrčī* 軍と Qizilbāš アミールの軍を常に区別しているのである。

かかる史料間の齟齬は一体何が原因なのか。次章では，アッバースの改革以降の *qūrčī* 軍の性格を改革以前のそれと比較しながら検討し，この問題についての手掛かりを得ることにしたい。

## Ⅱ　アッバースの改革以後の qūrčī 軍

改革以前の *qūrčī* 軍について前稿で取り上げ検討したのは，その構成，人員，職務，俸給，政治的役割，社会的地位，シャーとの関係などであった。ここでは，これら改革以前の *qūrčī* 軍の諸特徴を改革以後のそれと比較し，大旨継続している点，変化の見られる点の二つに大別して論を進めたい。

10) しかし一方，ʻAbbās Ⅰ世死後の時代の史料には，もはや「Qizilbāš のアミール（*amīr-i qizilbāš*）」なる表現は見出し得なくなることにも注意する必要がある。本文で取り上げたようにトルコマン部族出身のアミールが率いる軍勢は勿論存在したが，彼らは *amīr-i qizilbāš* という名では呼ばれていない。例えば ʻAbbās Ⅱ世時代，Qandahār へ進軍するサファヴィー軍を *AN* は次の様に記している：*"laškar-i ẓafar aṯar az umarā va qūrčiyān va ġulāmān va āqāyān"*〔*AN*：97〕。支配階級内部でのトルコマン部族出身アミールの地位の変化に伴って *qizilbāš* という語の用法も王朝創建期とは異なってきているように思われる。しかしこの問題に関しては他日を期して今はこれ以上触れない。

（i）継続の見られる諸特徴

DELLA VALLE（p.355）や G.DE CHINON（p.43）が証言しているように，この時代も *qūrčī* は主としてトルコマン部族出身者の中から選ばれている。部隊出身者以外の *qūrčī* は存在しなかった。ペルシア文史料には，前代と同じく *qūrčī* の名は一般に最後に部族名を伴って現われる。改革以後も，*qūrčī* 軍は主にトルコマン部族を母体としていたのである[11]。

*qūrčī* 軍自体のピラミット構造も継続している。この時代，一般の *qūrčī* から *yūzbāšī* へ昇進し，その後に長官たる *qūrčībāšī* の地位に就くという例が何例か見られるからである[12]。

*qūrčī* 職の親から子への世襲化傾向も相変わらず認められる。

> *muqarrab* の一員であり，剣の *qūrčī*（*qūrčī-yi šamšīr*）であった Ṭahmāsp-qulī Beg Šāmlū がジョルジアで数日の病の末死んだ。彼には父の座を継ぐ息子がなかったため，彼の職（*manṣab*）は同じ氏族（*qawm*）出身の Qarā Ḥasan Beg に与えられた。〔*TAA*：885〕

欧文史料では SANSON が *qūrčī* の世襲の原則に言及し，*qūrčībāšī* の同意のもとで息子は父の職を継ぐことが出来ると述べている（p.30）。*qūrčī* 軍の人的構成の基本は改革以後も変化していないと言える。

近衛兵としての *qūrčī* の職務にも変化に見られない。*RS* は *qūrčī* の語を「宮廷におけるシャーの従者」と規定しているし（fol.292b），DELLA VALLE も *qūrčī* は「王とその宮殿や天幕を守り，古代ローマの近衛兵（*i pretoriani*）に類似している」と記している（p.355）。

特別な名称を持ち，シャーの側近として働く一種のエリート *qūrčī* 集団（*qūrčī-yi šamšīr, qūrčī-yi tīr u kamān* など）も相変わらず史料に現われる。Bedik はこれら特別な *qūrčī* の名称の幾つかをトルコ語形で紹介している〔BEDIK：245-246〕。また *DM* にはそのペルシア語形が記され，簡単な職務内容の説明が付されている〔434〕。時代の推移に伴って *qūrčī-yi tufang*（銃の *qūrčī*）の如く新しく設けられた職もあるが〔*AN*：68, *DM*：434〕，大筋においてこの特別な *qūrčī* 職にも改革以前からの継続性を見出すことができるのである。

11) 但し Zīk 部の如きクルド族出身の *qūrčī* もいた。

12) 例えば後の *qūrčībāšī* 表（41頁）の 4.Allāh-qulī Beg, 5.ʿĪsā, Ḫān, 7.Amīr Ḫān などがそうである。

*qūrčī* への俸給支給制度も前代と変わらない点の一つである。*TM*, *DM* の記事により，*qūrčī* にはシャーから *tiyūl* と *mavāǧib* が支給され，*vazīr-i qūrčī* と *mustawfī-yi qūrčī* がその事務を取扱っていたことが確認されるからである[13]。

Šāh ʻAbbās 以前から見られるシャーと *qūrčī* 間の緊密な信頼関係にも変化はない。ʻAbbās Mīrzā（後の ʻAbbās I 世）を王位に即けようとする Ḫurāsān 派アミール達と，シャーの Muḥammad Ḫudābanda と皇太子 Ḥamza Mīrzā（その暗殺後は Abū Ṭālib Mīrzā）を戴く ʻIrāq 派アミール達との数年間に亘る死闘の末，1587年 Ḫurāsān 派の首魁 Muršīd-qulī Ḫān Ustāǧalū は ʻAbbās Mīrzā を伴って首都 Qazvīn に入城する。この時この強力な保護者に王位を与えられた ʻAbbās はその周囲に殆んど信頼のおける人物を見出すことが出来なかったに違いない。Qizilbāš アミール達の大部分は，自らの，そして自らの部族の利益のみを追求していた。ある者はより有利なポストを望んで Muršīd-qulī Ḫān の支持者となり，またある者はその権益を守るため反 *vakīl* の立場に回った。シャーはあくまでも象徴にすぎなかったのである。かくの如く ʻAbbās にとり好ましくない状況下，唯一例外的に自らを投げうって彼に仕える一団の人々がいた。ʻAbbās が一王子として Harāt にある時からその側近く仕えていた個人的護衛—*qūrčī*—がそれである[14]。我々は年代記史料から断片的にではあるがこれら ʻAbbās に忠実な *qūrčī* の名を拾い出すことができる。

*vazīr* の Ḫwāǧa Afḍal と Šāmlū の主だった者達（*āqāyān*）は，Harāt への想いを捨

13) *TAA* によると，1617-18年，Šāh ʻAbbās は軍隊（*mulāzimān-i rikāb-i ašraf*，この場合，*qūrčī*, *ġulām* などのシャー直属部隊のことと思われる）の俸給支払体系を改め，*hama-sāla* 制を導入したという〔*TAA*：924-925〕。*hama-sāla* 制とは，Minorsky によると各人の毎年の俸給を同一の土地などの収入から支払うもので，それまでの *yak-sāla* 制（割付手形（*barāt*）を毎年発行し，各人がその年だけのために定められた土地などの収入から俸給を得る）に比して，兵士にとっては有利なものであったという〔*TM*：152-153〕。しかし，これはあくまでも俸給支配手続の変化であり，俸給（*mavāǧib*）を支払うこと自体に変化はない。

14) シャー以外に，王子達も各自 *qūrčī* を伴なっていた。ʻAbbās Mīrzā の *qūrčī* については *TAA*：438，Šāh Ṭahmāsp の弟 Sām Mīrzā の *qūrčī* については *HT*：254参照。Šāh Ṭahmāsp 時代には *qūrčī* の語は，シャーの近衛兵という元来の意味以外に，広く護衛に近い意味でも使われていたようで，Membré は，一人の *sulṭān*（従って王族ではない）が宮廷に赴く時の供まわりの中に弓矢を捧げ持つ *oq yay qorčisī* がいたことを記している〔Membré：30〕。

て難く，Ustāǧalū 部の（勢力下にある Mašhad の）中では心の平安を得なかった。短期間のうちに一人また一人 Harāt へ逃げ帰った。そして Šāmlū 部のうち，Ḥusayn Beg ʻAbdillū と ʻAlī（-qulī）[15]Beg Garāmitlū 以外誰も Mašhad に残らなかった〔*TAA*：p.305〕。

これは Šah Muḥammad Ḫudābanda の治世後半，Harāt 知事 ʻAlī-qulī Ḫān Šāmlū と Mašhad 知事 Muršīd-qulī Ḫān Ustāǧalū が Ḫurāsān 派アミールグループの主導権争いを演じ，後者が前者を破ってその保護下にあった ʻAbbās Mīrzā を多くの捕虜と共に Mašhad へ奪い去ったのちの Mašhad での出来事を述べた *TAA* の記事である。ここに現われる Ḥusayn Beg は元来 *qūrčī-yi šamšīr* であり，のち ʻAbbās の親政時代には Harāt 知事となる〔*TAA*：441，942〕。また ʻAlī-qulī Beg は *qūrčī-yi tarkaš* であり，ʻAbbās 治世の後半には *īšīkāqāsībāšī* の要職につく〔*TAA*：420，1040〕。*qūrčī* だけが最後まで ʻAbbās を見捨てなかったのである。

さらに ʻAbbās 治世下 Hamadān 知事であった Ḥasan Ḫān Čāvušlū，Kirmān 知事であった Ganǧ ʻAlī Ḫān Zīk，Čuḫūr-i Saʻd 知事であった Amīr Gūna Ḫān Qāǧār の三名も皆元来 *qūrčī* であり，ʻAbbās Mīrzā の Ḫurāsān 時代からの従者であったことが確認される〔*TAA*：400-401，442，1040-41〕。

困難な時代におけるこれら *qūrčī* 達の私心なき奉仕は若い ʻAbbās の胸に深い印象を刻み込んだに違いない[16]。上述の五名の *qūrčī* が皆，後に要職についていることは，ʻAbbās の彼らに対する信頼を如実に示しているのである。

このようにアッバースの改革以後の *qūrčī* 軍団には，改革以前のそれとの間に多くの共通点を見出しうる。一見したところ，以前の姿をそのままとどめ改革の影響を何ら受けていないかのようにすら見える。だが実は，この他の幾つかの点で大きな変化が生じていたのである。

(ii) 変化の見られる諸特徴

兵員数の検討から始めよう。残念ながらこの期間のペルシア語文献には兵員総数を示

15) ペルシア語テキストでは ʻAlī Beg となっているが，Savory が英訳中で訂正しているように ʻAlī-qulī Beg が正しい。Cf.〔*RM* 26a〕。

16) 例えば *TAA* は *qūrčī-yi tīr u kamān* だった Ḥasan Ḫān Čāvušlū について次の様に述べている。「Ḫurāsān 時代からの部下グループの１人で，忠実にして気持ちよく，シャーの心を喜ばせる人物であった。」〔*TAA*：401〕。

す記事は見られない。従ってこの点に関しては欧文史料に全面的に依拠せざるを得ない。主なものを抜き出してみると次の通りである。

| | |
|---|---|
| GOUVEA〔116〕 5,000, | DELLA VALLE〔355〕 12,000, |
| OLEARIUS〔124〕 10,000, | DE CHINON〔43〕 12,000, |
| TAVERNIER〔591〕 22,000以下, | THÉVENOT〔191〕 25,000, |
| CHARDIN〔299〕 30,000, | KAEMPFER〔71〕 15-20,000, |
| GEMELLI CARRERI〔382〕 22,000 | |

TAVERNIER 以下については既に I で指摘したように *qūrčī* と *qizilbāš* を同一視しているため，その数字をそのまま信用することは出来ない。また GOUVEA（1600年ペルシア着）は，当時既に創設されていた *ġulām* 軍の存在にも全く触れておらず，その5,000という数字は改革以前の *qūrčī* 軍のものではないかと思われる。従って，唯一 *qūrčī* と *qizilbāš* を別のものとして区別している DELLA VALLE そして TAVERNIER 以下の如く完全には *qūrčī* と *qizilbāš* を同一のものと明言していない DE CHINON，OLEARIUS の10,000～15,000という数字が最も実数に近いと考えてよかろう。*qūrčī* と対抗させるために創設されたと言われる *ġulām* 軍が12,000～15,000程度の兵数であったことは大方に異存のないところであり[17]，このことからも上の DELLA VALLE らの数字の妥当性が証明されよう。Šāh 'Abbās の改革以後大規模な軍制改革が行なわれた形跡はないので，17世紀を通じて大体この10,000～15,000が *qūrčī* 軍の兵員数と見てよかろう。とすると，改革以前の兵員数最大限5,000〔羽田 1984：12-13〕が改革によって二倍から三倍に増員されたことになるわけである。

ペルシア語史料は間接的にではあるが，この定数増を証明している。1610-11年 Šīrvān 知事 Ḏū al-Faqār Ḫān Qarāmānlū が処刑されたが，Iskandar Munšī はこのハンの従者達について次の様な話を伝えている。

> Ḏū al-Faqār Ḫān の従者のうち Qarāmānlū 部出身者は *qūrčiyān-i 'iḍām* の列に叙せられ，残りの兵士は慣習に従って（*bi-dastūr*）Yūsuf Ḫān（新 Šīrvān 知事）に仕えるよう定められた。

一般にあるアミールがシャーの寵を失なった時，その従者（*mulāzimān*）は，このアミールに代わる別のアミールに与えられるのが常であった。従ってこの Ḏū al-Faqār Ḫān の場合はやや例外と言え，これを Šāh 'Abbās が *qūrčī* 軍増員のためにとった特別

17〔Бабаев 1973：26〕。

の処置と見做すことが出来るのである。この種の例は Šāh ʻAbbās 治世下他にも一～二見られる[18]。

変化の見られる第二の点は *qūrčībāšī* の政治的役割，社会的地位についてである。先ず Šāh ʻAbbās 即位後の *qūrčībāšī* を表にして示してみよう。

| 就位年 | qūrčībāšī 名 | 典拠 |
|---|---|---|
| 996/1587-88 | Yūsuf Ḫān b. Qulī Beg Afšār | *TAA*：381 |
| 996/1587-88 | Badr Ḫān Afšār | *ibid.*, 384 |
| 997/1588-89 | Valī Ḫān Afšār | *ibid.*, 402 |
| 1000/1591-92 | Allāh-qulī Beg Qapama-uġlī Qāǧār | *ibid.*, 439 |
| 1021/1612-13 | ʻĪsā Ḫān b. Sayyid Beg b. Maʻṣūm Beg Ṣafavī | *ibid.*, 858-859 |
| 1040/1631-32 | Čirāġ Ḫān Pīrzāda | *HS*：109-110 |
| 1041/1632-33 | Amīr Ḫān Suklān Ḏū al-qadr | *ibid.*, 125 |
| 1046/1637-38 | Ǧanī Ḫān Šāmlū | *ibid.*, 233 |
| 1055/1645-46 | Murtaḍā-qulī Ḫān Qāǧār[19] | *AN*：68 |

この表でまず第一に指摘されるべきは，Allāh-qulī Beg を除いて他の全員がサファヴィー朝国家における軍事貴族の最高称号たる *ḫān* 号を所有していることである。Šāh ʻAbbās 以前の *qūrčībāšī* が誰一人としてこの称号を持っていなかったこと〔羽田 1984：22〕を想起すれば，これがŠāh ʻAbbās 即位後の新しい現象であることは明らかであり，この時期の *qūrčībāšī* の社会的地位上昇を示す一つの好事例であると言えよう。

次に各 *qūrčībāšī* の就位年が史料に明確に記されていることに注目する必要がある。Šāh ʻAbbās 以前の時代には，各 *qūrčībāšī* がいつその職を得たかが確定できなかったばかりか，誰が *qūrčībāšī* であったのか判然としない期間さえあった。これに対して Šāh ʻAbbās 登極後にはかかる曖昧さは全く見られなくなる。年代記は *qūrčībāšī* の交代を必ず記録しているのである。我々はここにもこの職が政治的，社会的に前代と比較になら

18) 1627年オスマン軍が大軍を派遣して Baġdād を再攻略しようとするが，サファヴィー軍に阻まれ敗退する。この時この戦いで目覚ましい働きを見せた兵士がシャーの *qūrčī* に編入されている〔*TAA*：1057〕。また時には，反乱後改心した者，職のない者をシャーがその思寵を示す為に qūrčī とすることもあったようである〔*TAA*：820，*RM*：88a〕。

19) この人物は1666年 ʻAbbās II 世逝去時までこの職にある。それ以後については適当なペルシア語史料がなく，欧文史料によって断片的に人名を知りうるのみなので表化を断念した。

ぬほど重要度を増していたことを示す一つのしるしを読みとることができる。

具体的に *qūrčībāšī* が如何に強大な権力を握っていたかを見るため，ここで1021A.H.に *qūrčībāšī* となった ʻĪsā Ḫān に注目し，その略歴を調べてみよう。

この人物は Šāh Ṭahmāsp 治世後半に15年以上に亘ってシャーの摂政（*vakīl*）を務めた Maʻṣūm Beg Safavī の孫にあたり，Šāh ʻAbbās の娘と結婚してサファヴィー家とは姻戚関係にあった〔*TR*：30a〕。前後の *qūrčībāšī* と同様 *yūzbāšī* の地位から最高職の *qūrčībāšī* に昇進している。その在職中何度も軍の先頭に立って遠征を行ない[20]，また国政にも大きな影響力を持った。1629年1月 Šāh ʻAbbās が Māzandarān の Ašraf で没した際，彼は国家の柱石の筆頭として他の有力アミールと共に遺命通りその死を秘して Iṣfahān にいた Sām Mīrzā を即位させるため奔走する〔*TAA*：1072 sq.〕。そして無事 Sām Mīrzā が王位を継ぎ Šāh Ṣafī となった後はこの若い君主がすぐれた帝王となるよう機を捉えては助言を怠らなかった〔*HS*：22〕。新年にはシャーの御前で最前列の座を占め，贈物をまっ先に受取ったという〔*HS*：28〕。彼はこの当時正に臣下第一の地位にあったのである。しかし，このような彼の盛運も長くは続かず，1632年2月，ʻĪsā Ḫān は *qūrčībāšī* の職を解かれ，数ヶ月後処刑されてしまう。失脚の原因は，彼の三人の息子とその取巻き達の隠謀発覚にあったと諸史料は伝える。彼らはサファヴィー王家との血縁関係，そして ʻĪsā Ḫān の権勢を利用して，Šāh ʻAbbās 没時 ʻĪsā Ḫān の長男 Sayyid Muḥammad（ʻAbbās の孫にあたる）を新シャーの位に即けようとしたというのである〔*HS*：337-338，*DTAA*：86-90，257-258〕。噂の真偽はさておき，ʻĪsā Ḫān に大きな影響力がなければその一族による王位簒奪などという噂が流布する筈もなく，この失脚事件そのものが，逆の意味で *qūrčībāšī* ʻĪsā Ḫān の実力を証明しているのである。

*qūrčībāšī* のかかる高い地位と強大な勢力は王朝の末期まで変わることがなかった。1696-97年サファヴィー宮廷に使したポルトガル大使は *qūrčībāšī* のことをシャーの御前に坐る四人の大官の一人としているし〔AUBIN 1971：59〕，*TM* によれば *qūrčībāšī* は「至高なる国家の柱石のうち最も重要」な職であった〔116〕。さらに Nādir Šāh Afšār が王位に登る前，自らを *qūrčībāšī* と称していたこと〔*TM*：17〕もこの職の社会的，政治的重要性を証して余りあろう。

ペルシア語史料が *qūrčībāšī* という語に付与している形容句もこの職の重みを裏付ける。幾つか例を挙げてみよう。

20) 彼の軍事行動に関しては〔*TAA*：962，999-1000，1027etc.〕。

「至高なる *dīvān* 諸官職中最も偉大なる *qūrčībāšī* 職（*manṣab-i qūrčībāšī-garī ki mu'ẓam-i manāṣib-i dīvān-i a'lā*）」〔*TAA*：402〕

「国家の職務のうち最高の一つで，宮廷諸貴顕のうち高位にある *qūrčībāšī* 職（*qūrčībāšīgarī ki az mu'aḍimāt-i mahamm-i kārḫāna-yi salṭanat u pāya wālā-yi awliyā-yi dawlat ast*）」〔*TAA*：439〕

「国家の柱石たるアミール中最も偉大なる（*'umda-tarīn-i umarā-yi arkān-i dawlat-i bihīna*）」〔*TM*：11b〕

管見の限りこの種のある意味では仰々しい形容句がサファヴィー朝前半期の *qūrčībāšī* について用いられた事実はない。このことからも後半期 *qūrčībāšī* の有した重要性が証明できよう。

*qūrčībāšī* の力がかくの如く増大するに従って *qūrčī* 軍団にもう一つ見逃すことの出来ない変化が生じてくる。それは *qūrčī* 出身者が国家の他の重要ポストへ次々と進出していることである。軍制の根幹たる地方長官のポストについて検討してみよう。

RÖHRBORN の研究により，我々は 'Abbās Ⅰ世，Ṣafī，'Abbās Ⅱ世の三代に亘る期間（1587－1666）におけるサファヴィー朝領内14の大州の地方長官名を既に知っている〔RÖHRBORN 1966：33-37〕。これら地方長官は出身によって Qizllbāš 部族出身者と *ġulām* 出身者の二グループに大別できる。*ġulām* 出身地方長官については，RÖHRBORN も含め従来多くの研究者がこの時代の新現象として注目している[21]。しかし，もう一方の Qizilbāš 系グループにも目立たないながら一つの革新が起こっていることはこれまで全く看過されてきた。その革新とは *qūrčī* 軍メンバーの地方長官職就任である。

今一番豊富に史料の残されている Šāh 'Abbās Ⅰ世時代についてみてみよう。Baġdād がサファヴィー朝の手に戻った1624年，14州の長官12人（Kūh-Gīlūya と Fārs, Qandahār と Kirmān はそれぞれ同一の人物が長官職を兼ねる）のうち，*ġulām* 出身者が 4 名，Qizilbāš 系のものが 8 名いる。この 8 名のうち少なくとも 4 名（Harāt 知事 Ḥusayn Ḫān Šāmlū, Kirmān 知事 Ganǧ 'Alī Ḫān Zīk, Hamadān 知事 Ḥasan Ḫān Ustāǧalū, Čuḫūr-i Sa'd の知事 Amīr Gūna Ḫān Qāǧār）は，これらの職につく以前は *qūrčī* であったことが明らかである（本稿34頁参照）。Šāh 'Abbās 時代の年代記を繙いてみれば，シャーの Harāt 時代からの従者であるこの 4 人の将軍が，対ウズベク，対オスマン戦役で重要な役割を果たし，シャーの絶対的信頼をかち得ていたことが直ちに諒解される。

21）〔*TM*：17〕〔RÖHRBORN 1966：33〕〔БАБАЕВ 1973：26〕〔SAVORY 1980：79，81〕。

*ġulām* 出身の地方長官とならんで，彼らは地方長官中の中心的な存在であった。

サファヴィー朝前半期には *qūrčī* 出身者が他の有力ポストを占めることは極めて稀であった[22]のに対して，Šāh ʻAbbās の治世に入ると事情は一変する。*qūrčī* 出身者は組織的に国家の要職に就くようになるのである[23]。

以上の検討によって，Šāh ʻAbbās 以後の *qūrčī* 軍は，前代の原型 *qūrčī* 軍の基本的性格を保持しながらも，その兵員数，そして特に軍団長 *qūrčībāšī* の政治的役割，社会的地位など幾つかの点で顕著に変化していることが明らかとなった。これまで一般に考えられていた説[24]とは異なり，Šāh ʻAbbās は明らかに *qūrčī* 軍を拡充し，その重要性を増大させようとしているのである。これは一体如何なる理由によるのか。次章では，この問題を彼の Qizilbāš 対策との関連から考えてみたい。

## Ⅲ　Šāh ʻAbbās の対 Qizilbāš 政策

(i) 改革以後の Qizilbāš アミール達

*qūrčī* が主にトルコマン部族民—Qizilbāš—の中から選ばれたことは前章で述べた。この意味では，彼ら *qūrčī* は Šāh ʻAbbās の治世に先立つ時代のサファヴィー朝社会を特色づける基本的枠組の一つ，トルコマン遊牧部族連合の必要欠くべからざる一要素であった。ではこの部族連合の，あと一つのより重要な要素，Qizilbāš 各部族のアミール達は ʻAbbās の時代以降どのような運命を辿ったのであろうか。

結論から先に述べると，支配者集団内部での彼らの影響力は著しく低下しているのである。地方統治制度の一側面を検討することにより彼らの権力失墜の実態を知ることが出来る。

22) 管見の限り，Ismāʻīl Ⅰ世時代 *qūrčī* で Ṭahmāsp 時代にアミールとなる Mantašā Sulṭān Ustāǧalū, Ṭahmāsp 時代後期に *vakīl* となる Maʻṣūm Beg Ṣafavī があるのみである。但し，後者はサファヴィー家の一族出身で，Ṭahmāsp の対 Qizilbāš 政策の一環として重用されたのであり，やや特殊な例と言えよう。

23) 地方長官職以外についても，*dīvānbeg* から *īšīkāqāsībāšī* に昇進する ʻAlī-qulī Beg の名を我々は知っている。史料中に引用される極めて限られた数の有力アミール名の中で，コルチ出身者のそれが占める割合はかなり大きい。

24) Savory による *EI*² ḳūrčī の項には，「ʻAbbās Ⅰ世即位とともに *ḳūrčībāšī* の重要性は *ḳūrčī* のそれと同様減じて行った。」とある。

Šāh ʻAbbās は政治の実権掌握後宮廷の *ġulām* を組織して一軍を作り，自らの権力の拠り所の一つとしたが，これとは別に有能な *ġulām* を地方長官として国内各地に派遣し各地方の統治にあたらせた。いま一例として Fārs 地方をとりあげてみよう。

Šāh Ismāʻīl I 世麾下のサファヴィー軍が1503年にこの地方を占領し，Ilyās Beg Ḏū al-qadr が Fārs 州長官に任命〔*AIB*：94b〕されて以来，Šāh ʻAbbās の治世初期に至るまでの約90年間 Ḏū al-qadr 部族の部族長が次々とこの地方の長官職を占めてきた。ところが，1001/1592-93年，この部族は前年行なわれたシャーの Ḫurāsān 遠征に十分な兵力を供出しなかったとして罰せられ，1003/1594-95年には Fārs 州長官職を取り上げられてしまう〔*TAA*：458〕。この地方は一時的に Farhād Ḫān Qarāmānlū に委託され〔*TAA*：500〕，1004/1595-96年 Allahvirdī Ḫān Qullarāqāsī が新たに Fārs 州長官に任命される〔*TAA*：515〕。彼はその配下にあった *ġulām* 300人をこの地方の様々な行政職につけ，統治体制を整える。サファヴィー朝草創以来 *ġulām* が地方長官のポストに就くのはこれが初めてのことである。Allahvirdī Ḫān の死後はその息子 Imām-qulī Ḫān が父の後を継ぎ，Fārs 州長官となる。そして *ġulām* が地方政庁のトップに坐るというこの状況は，Šāh Ṣafī 治下の1042/1632-33年，Imām-qulī Ḫān が処刑され，Fārs 州が王領地（*ḫāṣṣa*）とされるまで続くこととなる。この期間，シャーが軍事行動を組織する毎に Allahvirdī Ḫān 次いで Imām-qulī Ḫān は Fārs の軍（*laškar-i Fārs*）と共にこれに参加している。史料はこの Fārs 軍の構成を詳かにしないが（例えばTAA：620, 649-650 etc.），これが主として Ḏū al-qadr 部族から成っていたことにはほとんど疑問の余地がない。Fārs 州長官職没収後，この部族が他地方へ移動させられた記録や，他部族が Fārs に移動してきた記録がない以上，この部族以外から，Allahvirdī Ḫān らが必要な軍事力を調達できたとは考えにくいからである。

もしこの仮定が正しいとすると，この時，サファヴィー朝国家創設以来初の全く新しい事態が生起したことになる。主としてトルコマン部族民で構成されながら *ġulām* に指揮される地方軍の出現である。これ以前，地方に駐屯する部族軍のすべては各部族の長，即ち Qizilbāš アミールの指揮下にあった。そしてこれら部族長達が当該地方の長官となり兵権を掌握していたのである。従ってサファヴィー軍を構成する殆んどすべての兵力は，シャー直属の *qūrčī* 軍か，さもなければ Qizilbāš アミールに指揮された各地方単位の部族軍に属していたことになる。

ところが，Šāh ʻAbbās により新制度が導入されるや状況は一変する。*ġulām* 出身アミールが長官職を占める地方では，地方軍はもはや部族民からだけ構成されているので

はなくなった。*ġulām* という要素が地方軍の性格を大きく変えることになったのである。兵権を確実に保持していてはじめて Qizilbāš アミール達は中央で大きな発言力を持ちえたのであるから，この新体制により彼らが国政において従来の如き大きな影響力を行使しにくくなったことは疑いない。また，トルコマン部族の一部が *ġulām* の指揮下に入ることにより，Qizilbāš は全体としてその独自性，純粋性を失ないはじめ，唯一 *qūrčī* 軍のみがサファヴィー朝国家成立以来の純粋部族的要素を代表する存在となっていったことにも注意する必要があろう。

地方長官職については，さらにもう一つ，Qizilbāš アミール達の権力失墜につながるこの時代の新しい現象を見い出しうる。既に上で検討した *qūrčī* 出身者の地方長官職就任がそれである。これら *qūrčī* 出身の地方長官と伝統的なトルコマン部族長兼地方長官とを混同してはならない。*qūrčī* 出身地方長官も確かに元来所属する部族名をそれぞれの姓名の最後に保持してはいるが（例えば Amīr Gūna Ḫān *Qāǧār*），彼らが地方長官のポストにまで到達しえたのは，それぞれの部族内部での彼らの実力によるのではなく，*qūrčī* としてのシャーへの忠誠心からであったからである。史料によっては，彼らが任命先の地方の部族民と血縁関係を有していなかったと述べているものすらある〔*RS*：292b〕。これは極端な例であるにせよ，シャーに忠実な *qūrčī* 出身の長官を頂点に置く地方の部族社会が，以前と比較してより容易にシャーによって統御されえたであろうことは確実である。

Šāh ʻAbbās Ⅰ世治世後半には *qūrčī* と *ġulām* 出身の地方長官が，この職全体の少なくとも 3 分の 2 を占めることとなり，これにより Qizilbāš のアミール達が従来保持していた特権的地位が根底から掘り崩されることとなるのである。

Šāh ʻAbbās 時代には，それ以前，特に Šāh Ṭahmāsp 死後の混乱期にはしばしば開かれ，国家の重要事を討議した部族代表者の会議が開催されることもなくなる[25]。唯一 *qūrčībāšī* だけが，*qūrčī* 軍のみならず全 Qizilbāš を代表し[26]，各部族の長は存在はしていたにせよ政治の表舞台で重要な役割を果たすことは殆んどなくなってしまうのである。

このように，Šāh ʻAbbās の時代を境にして，*qūrčī* 軍とその長 *qūrčībāšī* は影響力を著

25) 最も有名なこの種の会合は，Muḥammad Ḫudābanda 即位直後のものである。この時各部族を代表する有力アミールのすべてが，当時の宮廷の実力者 Parī Ḫān Ḫānum の前に集まっている〔*TAA*：233〕。

26) 特に王朝末期にはこの傾向が強い。*TM* は *qūrčībāšī* を次の様に規定している：*rīš safīd-i qāṭi-ba-yi īlāt va ūymāqāt-i mamālik-i maḥrūsa*〔11b〕。

しく増大させたのに対して，その母体たるトルコマン部族と Qizilbāš のアミール達は以前の特権的地位を失なって凋落の途をたどり，両者の明暗はくっきりと際立つことになる。

(ii) 史料間齟齬の解釈

Qizilbāš アミール達の勢力が上述の如く低下したことが明らかとなると，本稿第一章で問題とした欧文とペルシア文史料間の *qūrčī* という語の語義の相違についての解答は容易に得られるように思える。

17世紀にイランを訪れた欧人の報告を詳細に検討してみると，サファヴィー朝軍隊については大別して2つの描写があることに気付く[27]。1つは DELLA VALLE〔348-355〕，CHARDIN〔298-309〕のそれで，ペルシア軍は4軍から成っているとする。DELLA VALLE によれば，それは *qūrčī* 軍，*qizilbāš* 軍，*ġulām* 軍，*tufangčī* 軍であり，CHARDIN によれば，地方長官指揮下の軍，*qūrčī* 軍，*ġulām* 軍，*tufangčī* 軍である。もう一つは彼ら二人以外のすべての欧人の報告に見られるもので，3軍—*qūrčī* 軍，*ġulām* 軍，*tufangčī* 軍—がペルシア軍を構成していたとする[28]。この不一致は以下の如くに説明できよう。

1617年にペルシアに到着した DELLA VALLE は *qūrčī* と *qizilbāš* の相違に気付いた。Šāh 'Abbās による改革が行なわれてからまだ日が浅く，Qizilbāš のアミール達はなお無視できない影響力を持っていたのであろう。しかも，王朝創建以来の *qūrčī* と *qizilbāš* の両語間の明確な意味の相違はたやすく消え去ることはなかったに違いない。Della Valle は確かに秀れた観察者であったが，同時に時も彼に味方していたのである。

時を経るに従い *qūrčī, qizilbāš* 両語の区別は曖昧となってゆく。*qūrčī* 軍がその重要性を保持し続けたのに対し，狭義の Qizilbāš の勢力衰退は著しく，ついにはヨーロッパ人観察者の目にその存在が明確に意識されなくなるのである。主に遊牧部族民から構成される地方軍の頂点に立つ *ġulām* の存在が現実をさらに分かりにくいものにしたに違いない。'Abbās I 世死後にイランを訪れたヨーロッパ人達のほとんど全ては *qūrčī* が *qizilbāš* の同義語だと見做したが，それは，一方で *qūrčī* 軍の強大さが有名な Qizilbāš

27) 繁雑さを避ける為，ここでは砲兵隊やその他の小部隊を考慮に入れない。

28) 〔CHINON：42-45〕〔TAVERNIER：591-594〕〔THÉVENOT：191〕〔KAEMPFER：70-73〕〔SANSON：30-32〕。GEMELLI CARRERI (p.382) は，ペルシア王の軍が次の様に四軍から成っていたとする。即ち〝Corchi 或いは Kesel-Bachi〟，〝Goulams〟，〝Tufinkgis〟と〝ペルシア人から構成され Sapeh Salar に指揮される軍〟である。しかし，この空想旅行家も *qūrčī* と *qizilbāš* を同一視していることに変わりない。

の呼称にふさわしいものであったし，他方，当時 *qūrčī* 軍だけが唯一純粋な部族的要素を代表していたからでもあったのである。

もう一人の有能な観察者 CHARDIN は，DELLA VALLE に約50年遅れてペルシアを訪れたが，さすがに地方軍の存在を見逃がしはしなかった。しかし，この軍をどのように説明すべきか迷い結局地方長官指揮下の軍としてその兵力を示すにとどまった。兵力が他の三軍に比して図抜けて多いこの地方軍こそ実は ‘Abbās I 世以前国軍の中心となり，DELLA VALLE が Qizilbāš と定義したものの後裔だったのである。*qūrčī* 軍の増強，*ġulām* や *qūrčī* 出身アミールの地方長官職への任命といった Šāh ‘Abbās の一連の対 Qizilbāš 政策の結果，地方駐屯軍はその重要性，独立性，さらには個有の名称までも喪失してしまったのである。

CHARDIN も結局他のヨーロッパ人達と同様 *qizilbāš* の名を *qūrčī* 軍に冠す。*qūrčī* が，元来 Qizilbāš と呼ばれていたトルコマン部族全体と同一でない以上，この点で CHARDIN が誤りを犯したことは事実である。しかし，だからと言って彼を責めるのは酷であろう。ヨーロッパ人にとって Šāh Ismā‘īl 以来の高名な Qizilbāš の語を適用するにふさわしいのは，当時純粋部族要素を代表していた *qūrčī* 軍だけだったからである。

これに対して，ペルシア語年代記作者達はさすがに *qūrčī* と *qizilbāš* の相違を熟知していた。管見の限り，ペルシア語年代記には *qūrčī* の語について一件の誤用もない。*qūrčī* とは例外なく *qūrčī* 軍の構成員のことを指示している。一方 *qizilbāš* の語は，後代になるほど使用頻度が減少するようだが，この語が *qūrčī* 軍のことだけを指す場合は決してない。また地方軍については，「某地方の長官，某 Ḫān の部隊」という形で引用されている。

かくて，*qūrčī* と *qizilbāš* という二つの語の史料間齟齬は，決して誤解や偶然の産物ではなく，Šāh ‘Abbās の改革以後のこの 2 つのグループの勢力消長と密接な関係を有していたのである。

## おわりに

Šāh ‘Abbās は自らの権力基盤を全面的に *ġulām* に求めたわけでは決してなかった。一方で，Qizilbāš から選ばれた *qūrčī* 軍もシャーを支える有力な柱に成長し，サファヴィー朝後半期にはこの *ġulām* と *qūrčī* という二つの常備軍が両輪となってシャーをバックアップしていたのである。*qūrčī* 軍があったからこそ，Šāh ‘Abbās の後継者達は力を持ちすぎた有力 *ġulām* を安心して粛清することが出来た。

この改革の結果を *qūrčī* 軍自身の枠組の中で考えてみると，それは疑いもなく大躍進と言えよう。しかし *qūrčī* がその一部として属する広義の Qizilbāš 全体の問題として把えた時事情は一変する。これは後退，衰微以外の何ものでもなかった。侮り難い軍事力を有する Qizilbāš を全く切り捨ててしまうわけには行かない Šāh ʻAbbās は，このうち自らに忠実な部分をむしろ優遇，増強して大いに利用し，残りの部分には厳しい態度で臨むという二面作戦を採用していたのである。Šāh ʻAbbās の政治的天才が遺憾なく発揮されているのは正にこの点においてである。

遊牧部族連合に軍事力を全面的に依拠する伝統的な国家体制はアッバースの改革をもって一応終わりを告げ，これ以後は，*qūrčī*, *ġulām* の両常備軍に支えられたより中央集権的な新しい体制が機能して行くこととなる。

但し，この新体制は，サファヴィー朝成立以前からイランの地に確固たる根を張っていた遊牧部族社会そのものを犠牲にしてうち立てられたものではない，ということには注意しておく必要がある。幾つかの大部族の分割はあったにせよ，地方に展開するトルコマン部族の基本的組織自体は全くそのまま残存した。*ġulām* や *qūrčī* 出身の地方長官が中央からシャーの権威を背景に赴任して来，これら部族の上に立つこともままあったが，彼らは組織そのものに手をつけるに至らなかった。中央からの統制が弱まると，地方に雌伏していたトルコマン部族が再び第一線に浮かび上がってくるのは至極当然であった。サファヴィー朝没落後の Afšār や Qāǧār の勃興もこのような観点から説明できよう。この意味では，アッバースの改革は，伝統的イラン社会の枠組を根本から揺り動かす大事業ではなかったとも言えよう。

## 文 献 略 語 表

**〈ペルシア文史料〉**

*AIB*: 著者不明 Šāh Ismaʻīl 史 ms. British Library, Or. 3248.

*AN*: Ṭāhir Vahīd Qazvīnī, ʻ*Abbās nāma*, ed. I. Dihqān, Arak 1329.

*DM* : Mīrzā Rafīʻa, *Dastūr al-mulūk*, ed. M.T. Dānišpažūh, *Maǧallah-yi dāniškada-yi adabiyāt va ʻulūm-i insānī (Tehran),* XVI (1347-48), pp. 62-93, 298-322, 415-440, 540-564.

*DTAA* : Iskandar Beg Munšī, *Ḏayl-i tārīḫ-i ʻālam ārā-yi ʻabbāsī*, ed. S. Ḫunsārī, Tehran 1317.

*HS*: Muḥammad Maʻṣūm Iṣfahānī, *Ḫulāṣat al-siyar*

独訳　G. Rettelbach, München 1978.

*HT*: Qāḍī Aḥmad Qumī, *Ḫulāṣat al-tavārīḫ*, ed. I. Išrāqī, Tehran 1980.

*QH*: Valī-qulī Šāmlū, *Qiṣāṣ al-ḫāqānī*, ms. Bibliothèque Nationale, supplément persan 227.

*RM*: Ǧalāl al-dīn Munağğim Yazdī, *Rūznāma-yi Munağğim Yazdī*, ms. British Library, Or. 6263.

*RS*: Mīrzā Beg b. Ḥasan Ḥasanī Ǧunābādī, *Rawḍat al-ṣafaviyya*, ms. British Library, Or. 3388.

*TAA*: Iskandar Beg Munšī, *Tārīḫ-i 'ālam ārā-yi 'abbāsī*, ed. I. Afšār, Tehran 1334.

*TM*: Mīrzā Samī'ā, *Taḏkirat al-mulūk*, ファクシミリ版，英訳，注釈 V. Minorsky, London 1943.

*TR*: Bīǧān(?), (*Tārīḫ-i Rustam Ḫān*), ms. British Library, Add. 7655.

**〈欧文史料〉**

BEDIK, P., *Cehil-Sutun*, Wien 1678.

CHARDIN, J., *Voyages du Chevalier Chardin en Perse*, 10 vols., Paris 1811.

DE CHINON, G., *Relations nouvelles du Levant ou traités de la religion, du gouvernement et des coutumes des Perses, des Arméniens et des Gaures avec une description particulière de l'établissement et des progrès qu'y font les missionnaires et diverses disputes qu'ils ont eues avec lès Orientaux*, Lyon 1671.

GEMELLI CARRERI, *Voyage autour du monde*, Paris 1719.

GOUVEA, A., *Relation des grandes guerres et victoires obtenues par le roi de Perse Chah Abbas contre les empereurs de Turquie Mahomet et Achmet son fils et suite du voyage de quelques religieux de l'ordre des hermites de Saint Augustin envoyés en Perse par le roi catholique Dom Philjppe second, roi du Portugal*, Rouen 1646.

KAEMPFER, E., *Am Hofe des persischen Grosskönigs (1684-85)*, Leipzig 1940 (Tübingen 1977). 〔Hinz, W による独訳〕

DU MANS, R., *L'Estat de la Perse en 1660*, Paris 1890.

MEMBRÉ, M., *Relazione di Persia (1542)*, Napoli 1969.

OLEARIUS, A., *Relation du voyage d'Adam Olearius en Moscovie, Tartarie et Perse*, Paris 1659.

SANSON, M., *Voyage ou relation de l'Etat présent du royaume de Perse*, Paris 1694.

TAVERNIER, J.B., *Les six voyages ... qu'il a fait en Turquie en Perse et aux Indes*, 2 vols., Paris 1676.

THÉVENOT, J., *Suite du voyage du Levant dans laquelle --- il est traité de la Perse et autres sujets du roi de Perse*, Paris 1674.

DELLA VALLE, P., *I viaggi*, (ed. et commentaires) F. Gaeta et L. Lockhart, Roma 1972.

## 参 考 文 献

AUBIN, J.

1971 *L'ambassade de Gregório Pereira Fidalgo à la cour de Châh Soltân-Hosseyn 1696-1697*, Lisbonne 1971.

БАБАЕВ, К.

1973 Военная реформа Шаха Аббаса (1587-1629),

*Вестник московского университета, Востоковедение.* 1973-1 : 21-29.

羽田　正

1978 「サファヴィー朝の成立」『東洋史研究』37-2 pp.24-56

1984 「コルチ考——十六世紀イランの近衛兵制度」『史林』67-3 pp. 1 -23

ROEMER, H. R.

1983 The Qizilbash Turkomans : Founders and victims of the Safavid theocracy. *Proceedings of the thirty first international congress of human sciences in Asia and North Africa 1983*, Toho Gakkai, Vol.I pp. 360-361.

RÖHRBORN, K. M.

1966 *Provinzen und Zentralgewalt Persiens im 16. und 17. Jahrhundert.* Walter de Gruyter & Co. Berlin.

SAVORY, R. M.

1978 *History of Shah 'Abbās the Great.* 2 vols. Westview Press, Boulder.

1982 'Abbās I. *Encyclopaedia Iranica.* I-1, pp. 71-75. Routledge & Kegan Paul, London, Boston and Henley.

SÜMER, F.

1976 *Safevî devletinin kuruluşu ve gelişmesinde Anadolu Türklerinin rolü.* Güven Matbaası, Ankara.